

第9回 特別企画展 『江戸名所図会に見る江戸と川崎』

今回の特別企画展では、天保5(1834)年と天保7(1836)年の2回に分けて 10冊ずつ出版された『江戸名所図会』全 20冊を、刊行当時の版組本で展示致しました。

今回の企画は、千代田区立日比谷図書文化館のご好意で、同館が収蔵する『内田嘉吉文庫』(全約 16000冊)に含まれる『江戸名所図会』全巻と関連図書を、貸していただいたことによって、実現を見ました。記して感謝申し上げます。

同書は、代々内神田雉子町の名主を務めた、町方の名門斎藤長秋、莞斎、月岑の親子3代が、1770年代から半世紀を超える歳月をかけ、ようやく完成を見た渾身の力作です。出版に至る経緯は、同書の第1巻の冒頭にある、若桜藩(因幡の国鳥取藩の支藩)の藩主松平定常の序文に詳しく、それによると、「斎藤長秋は当時江戸でも評判になっていた『都名所図会』に刺激を受け、江戸の名所を広く渉猟して描写することを志したが、完成を見る前に没してしまった。残念に思っていたところ、義父の志を知る養子の莞斎が、名所の枠を広げて郊外分などの追補に励み、寺社仏閣の由来から祭礼風俗、さらには地名の由来などまで詳細に記述し、かつまた画家の長谷川雪旦に図会を依頼したと聞き及んでいたが、莞斎もまた、公刊に至らぬまま没し、ようやく孫の月岑の手で刊行の運びとなった。」おおよそ、このような経緯が語られています。

ここから、うかがい知ることが出来るのは、1770年代の田沼時代の頃には、京都をはじめ、各地で『名所図会』のような名を持つ、名所紹介の観光案内書(ガイドブック)が出版され、そのいずれもが評判を呼び、飛ぶように売れていたということです。江戸時代は、その前半の元禄時代の初めごろまでは、開墾に依る農地の拡大と穀類の生産量の増大を背景に、人口の増加も続き、庶民の生活も多いに潤ったのですが、その後、高成長の反動による不況停滞期を迎え、8代吉宗の登場による適地適作農業の奨励、穀類(特に米作)中心農業の転換によって、果樹などの商品作物やイモ類などの作付に転換して、再度の繁栄を迎え、田沼時代にはそのピークを迎えていました。やがて、松平定信の寛政の改革が行われますが、倭約令や棄捐令、帰農令などは評判が悪く、彼の改革は悪評噴々で僅か6年で失脚します。こうした時代に長秋は、『江戸名所図会』の原稿を書きためていたのです。

つまり幕府や藩の財政は火の車で、武家の生活は困窮の度を増していたのですが、そうした武家の苦悩とは一線を画して、庶民の暮らしは少しずつ向上し、夫々が多少の娯楽を楽しむ余裕が出てきていたのです。富裕な者には、伊勢参りや都見物に出かけるものもいたのですが、大半の庶民には、日帰りの遊興がやっとだったのでしょう。そのため、手近な地域の『名所案内』が待望されていたのです。

こうして、天保年間の5年(1834)に1~3巻 10冊、7年(1836)に4~7巻 10冊が、刊行され、大人気を博したのです。当然何度も版を重ねて、大評判になりました。

さて、斎藤家3代の労作『江戸名所図会』は、単なる観光案内の域をはるかに超えています。代々内神田雉子町の名主を務める斎藤家の当主は、いずれも深い学識を持ち、いずれもが当代有数の学者たちと交流を持つ、大変な勉強家であり、教養人でした。そのため、その記述は、単なる観光案内や名所旧跡の説明にとどまらず、古今東西の文献を読み込んで自在に引用することで、寺社仏閣や名所旧跡の由来の説明に深みを与え、さらに地名の由来や祭礼風俗に関しても、考えられる限り過去をどこまでも遡って、言い伝えの根拠を探り当てようとする姿勢を貫いています。こうした3代の姿勢を、長谷川雪旦の臨場感溢れる画業が、より魅力あふれるものになっているように思われます。

なお、夫々の絵の解説は、水谷剛氏にご協力いただきました。

目次

(上巻)

1. 日本武尊東夷征伐の図
2. 江戸東南より内海を望む図
3. 元旦諸侯登城の図
4. 日本橋
5. 日本橋魚市
6. 駿河町三井呉服店
7. 本町薬種店
8. 十軒店雛市
9. 鎌倉町豊島屋酒店
10. 飯田町中坂九段坂
11. 御茶ノ水水道橋
12. 於玉が池の古事
13. 錦絵
14. 両国橋
15. 新大橋
16. 永代橋
17. 増上寺
18. 泉岳寺

(下巻)

19. 登戸宿
20. 登戸の渡し
21. 日野津
22. 多摩川
23. 玉川鮎狩
24. 府中六所の宮
25. 四谷大木戸
26. 金龍山浅草寺
27. 金龍山浅草寺 其二 二十軒茶屋
28. 金龍山浅草寺 其四
29. 節分会
30. 回向院
31. 五百羅漢寺
32. 六郷渡し場
33. 河崎山王社
34. 大師河原大師堂
35. 生麦村しがらき茶店
36. 小机城址 雲松院
37. 稲毛薬師堂 (医王山影向寺)



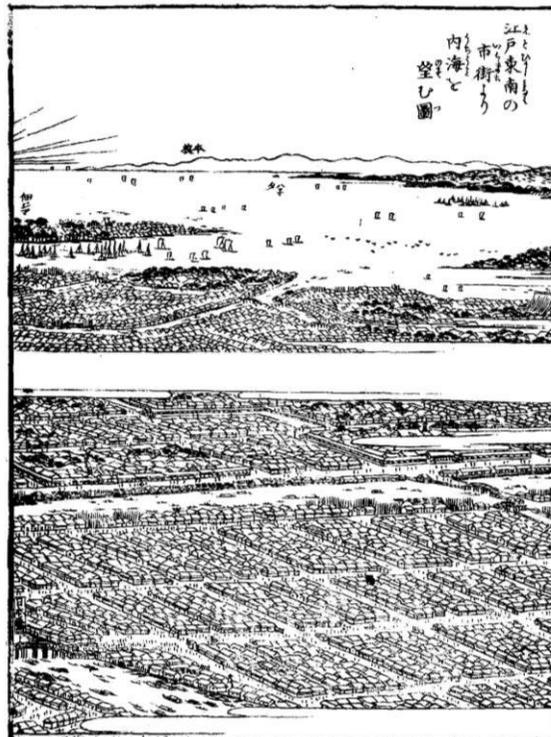
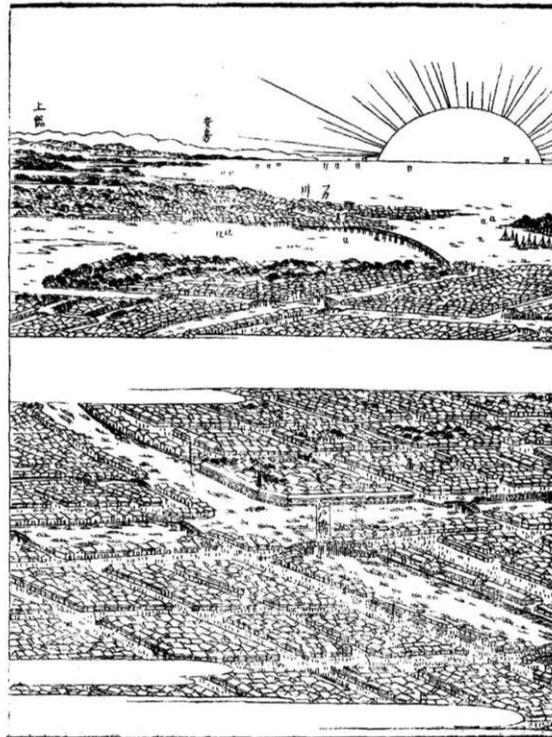
日本武尊東夷征伐の時、武蔵野に於て、岩倉山に於て、是武蔵國号の濫觴なり。
 倭健武家猛征西又伐東、曠間十未旬、草薙偃威風、春野子

1. 日本武尊東夷征伐の図

「江戸名所図会」20巻の全740枚ある絵図で最初の掲載図で「武蔵国」の説明に付随する絵図である。「風土記抄」によると「武蔵野の国、秩父山系の一つである岩倉山はその山容が険しいので勇者が怒り立っている様であり、日本武尊がこの山に東夷征伐の祈願をされ、その後東夷をすべて征伐したので再び立ち寄り、鎧などの武具を収めた。蔵は[納める]ことを意味するので武具を納める蔵でこの国(地方)をく武蔵と称した。」とある。

また、「続日本書紀」に「称徳天皇の御代(768年)武蔵野国から白い雉を天皇に献じたところ「武と文の双方を尊ぶ」旨の御言葉があり、その後正式に「武蔵」の字を以て嘉名とした」との記事がある。

東照宮様(徳川家康)がこの地に大きい城を築き江戸の基礎を開いたことで四海(全国)干戈(戦争)の苦勞がなくなり、万民が太平の幸せに浴することは、天意でもあり、国の名前も自ずから平和の御代に応じたものである。

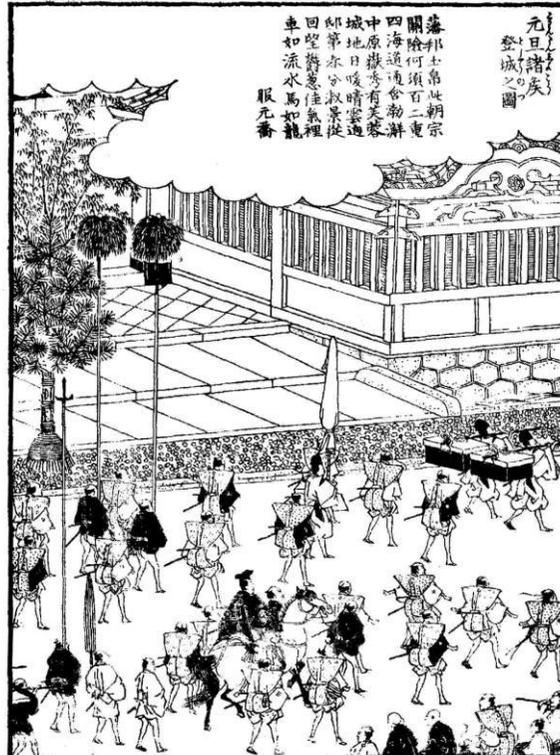
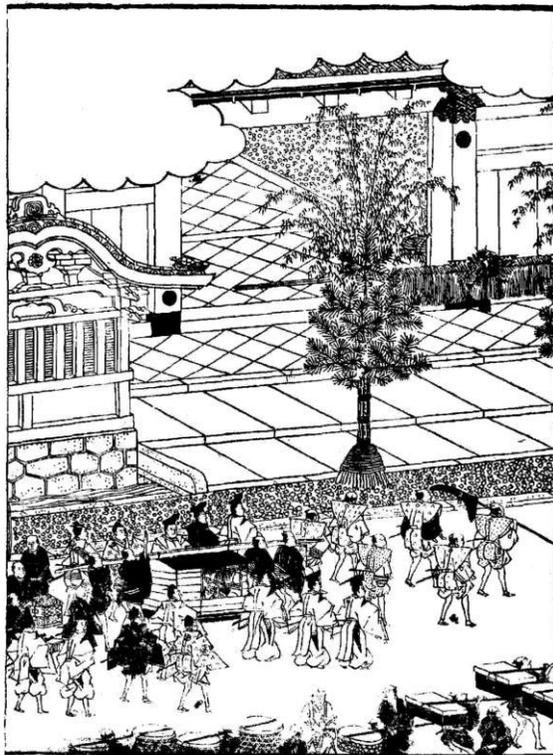


江戸東南より内海を望む図
 空し圖

2. 江戸東南より内海を望む図

当時江戸は世界でもトップクラスの100万の人口を抱える大都市であった。この図は江戸市中を東北の方向からの鳥瞰で精密に描いたもので家屋の一軒一軒が運河沿いに描かれている。意図的に江戸城の方向や大名屋敷の立ち並ぶ所は避けており、武家社会の存在をぼやかして町人世界の存在感を強調している。佃島の先の湾の遥かかなたに正月元旦の朝日が望まれ次の絵図「元旦諸侯登城の図」につなげている。江戸湾のそこかしこに漁をしている帆掛け船が多く見え、遠く左手に安房上総、右手に本牧の地名がある。

江戸湾に注ぐ川の手前真真中に日本橋、下流に江戸橋の表示がある。また、ほぼ同時代に大江戸を鳥瞰で描いている有名な絵図に津山郷土博物館所蔵の「鋏形蕙斎の江戸一目図屏風」がある。津山藩のお抱え絵師として、反映する江戸の全体を江戸城中心に描いた図になっている。



元旦諸侯登城之圖
 藩邦士庶此朝宗
 關險何須百二重
 四海通衢會衆
 中原謀勇有英
 城地日晴雲
 仰第尔分淑景
 回望藝志佳氣
 車如流水馬如
 駟九衢

3. 元旦諸侯登城の図

この図は江戸の大名屋敷の門前を大名諸侯が徳川将軍に新年の年賀挨拶のため登城するときの行列で、大名たちはそれぞれの江戸屋敷から登城する。拝賀の礼は、各大名の格式によって日が決められ、元旦だけでなく3日まで続いた。元旦の登城は徳川一門と譜代大名に限られ、卯の刻(午前7時)が登城時刻だったというから、大名たるもの元旦といってもものんびり出来なかった。

本図では、2組の大名が城中での「将軍家年始の儀式」に参加するため江戸城に向かう行列を描いている。大名屋敷の荘厳な門構えは、1857年の明暦大火で大部分は灰燼に帰している。江戸在住の大名は、毎年正月は下記のように大忙しとなる。

元旦～3日:「江戸城に御一門方並びに御譜代大名諸御役人御礼」

10日:「上野寛永寺御成、諸大名装束御参詣」

17日:「江戸城紅葉山東照宮参詣」(御三家は将軍が家康命日で参詣するとき随行)、「上野寛永寺、諸大名参詣」

24日:「増上寺御成、諸大名御参詣」

新年挨拶以外に正月に3回、年間11回の寺院参詣を強制された。その都度、家格に応じた供揃えで長時間の移動や待機等での時間を過ごすことになる。大名一同のみでなく、この行列の道筋では、江戸の一般町民は火気厳禁のため食事準備の煮炊きもできないばかりか、通行遮断など大迷惑であった。

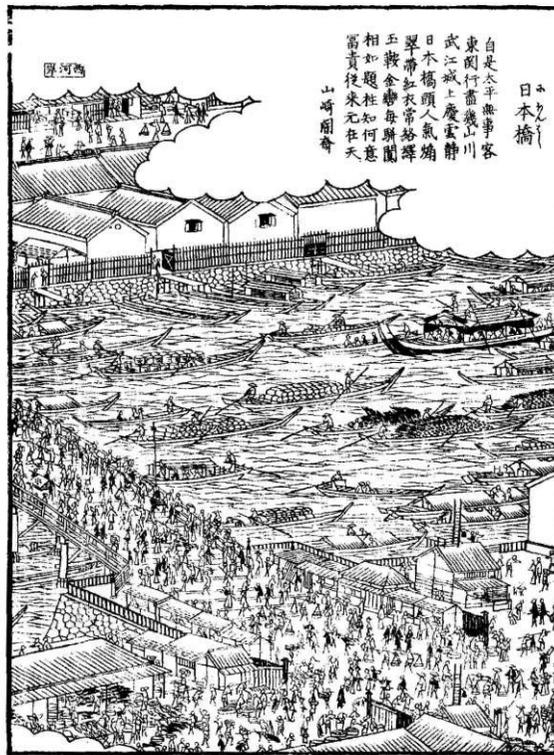
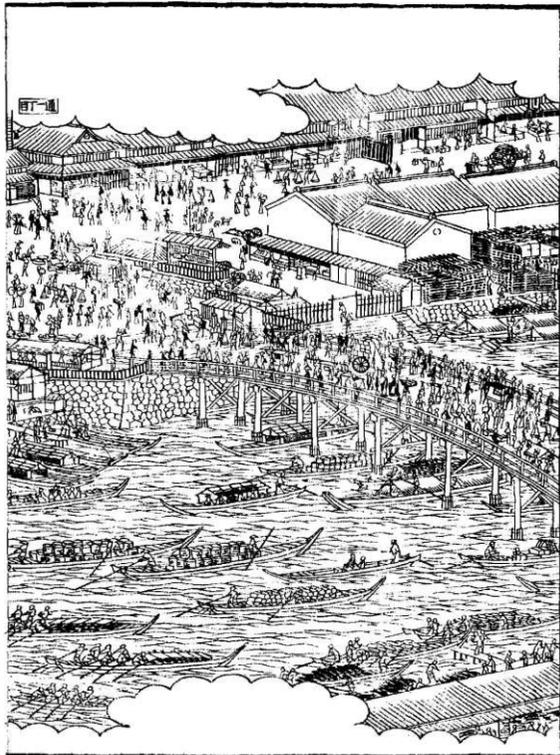


日本橋
 魚市

4. 日本橋

図の右上に「日本橋」と称する漢詩がある。この詩は山崎闇斎(儒学者)が初めて江戸を訪れたときに人生における出発の感慨を詠ったものである。日本橋は旅立ちの場、出発点、始まりの空間としての意味が込められている。図の上部に「通一丁目」とあるが、そのすぐ右下の石垣上部に高札が立てられて奉行所からの通達などが掲示されている。図では小さくて見えないが、橋の欄干葱宝珠の銘に「万治元年(1658)9月造立」とある。この場所は江戸の中央で諸方面への行程もこの日本橋から距離を定めている。

橋の上は貴賤区別なく大勢の人々が行き交う。又橋の下を多くの漁船が江戸湾から魚を積んで市場に出入りし朝から晩まで騒がしいことである。橋の北側を室町1丁目といい、この街の南東の角では漆器や旅道具・荷馬装束などを商している店が多い。また、東側の河岸を舟町といい、多くの魚屋が毎日市を立てて賑やかな呼び声が行きかい誠に賑やかである。

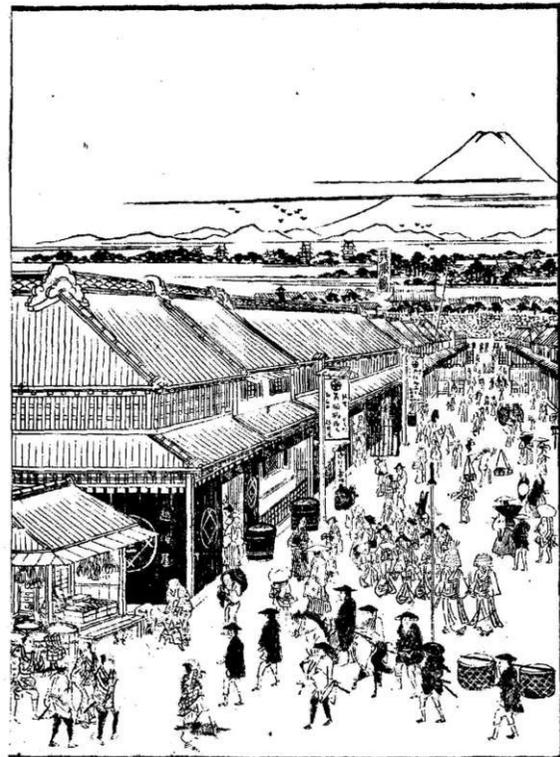


5. 日本橋魚市

舟町、小田原町、按針町等の日本橋周辺の町では多くの鮮魚市が立ち並び100万都市大江戸の胃袋を満たす役割を一手に担った。遠近の浦々から鮮魚を運送し、日夜市を立てて大いに賑わう。現在の日本橋室町や本町あたりに魚河岸があり、江戸湾など近海で獲れた鮮魚がここに集まり、魚行商:棒手振(ぼてふり)などを通して江戸の人々に食された。

日本橋から江戸橋までの日本橋川北岸一帯が日本橋魚市で、南岸の四日市町には塩魚や干魚を扱う塩魚問屋があり、本材木町には「新場」とよばれる魚市場があり、その賑わいは江戸の名所として多くの浮世絵に取り上げられている。江戸名所図会の本文には芭蕉と其角の俳句が紹介されている。

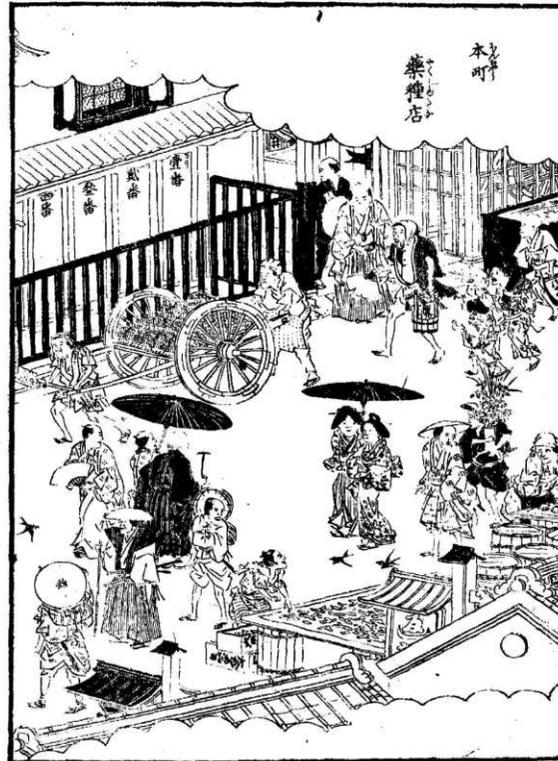
鎌倉を 生きて出でけん はつがつお 芭蕉
帆をかぶる 鯛のさわぎや 薫る風 其角



6. 駿河町三井呉服店

駿河町の町名の由来は江戸城の向こうに駿河の富士山を望むことからという。ここからの富士山の眺望は江戸一と言われていた。現金掛け値なしの商売で知られる、呉服屋の三井越後屋(後の三越)があった。創始者の三井高利は、延宝元年(1673)、日本橋の本町に呉服店を開き、天和3年(1683)に駿河町に移転して新商法で急速に発展した。今の中央区日本橋室町 1~2 丁目付近にあたり、現在は道を挟んで右に三井信託銀行、左に三越百貨店がある。絵図には宗鑑の俳句が紹介されている。

元日の みるものにせん 不二の山 宗鑑



7. 本町薬種店

本町とは、江戸の大元の町、という意味で、徳川家康が江戸入府直後の天正 18 年(1590)9 月に、最初に作った町人地である。また、江戸城大手門の真東に位置し、諸街道の起点である日本橋に隣接していたところから、「本町」と名づけられた。土蔵造りの各種の間屋が店を連ねている。現在もこの場所は製薬会社の建物が軒を連ね、「葉の博物館」や「葉祖神社」など葉の町らしい施設も多くあり、毎年10月には「葉祖神社」の例大祭が行われ多くの参拝客が訪れている。

店の前の通行人を見ると、家来を連れた武士の一行が通り、家来の人数から考えると500石から600石くらいの武士と思われる。その前には、三味線を抱えた2人連れの鳥追いの姿が見える。鳥追いは、正月元旦から15日くらいまでの事を云い、それ以外の日は、女太夫と呼ばれた。反対側には露店が2つある。貝やヒトデらしきものが見える。

店の前を、大八車が通る。大八車の由来は、8人の男の能力を持っているからとも言い、大工の八佐衛門が始めたからともいう。その後ろには、子供を連れて、頬かぶりをして右手に扇子を持ち、左手に手桶を持っている男がいる。このように、神仏祈願の代参・祈祷をして米・銭を貰って歩くのを願人坊主と呼んだ。

近くには、戯作者・式亭三馬も店を構え、「江戸の水」と名をつけた化粧水を自ら宣伝してギヤマン製箱入り一箱48文で販売していた。



8. 十軒店 雛市

本町と石町間の大通りで軒端を並べたひな人形店は、桃の節句や端午の節句では大いに賑わった。現在は日本橋から神田駅方向の中央通り沿いの室町3丁目のあたりである。

五代将軍綱吉が、京都の雛人形師 10 人を招き、ここにお長屋 10 軒を与えたことから 3 月、5 月には節句人形が軒なみ飾られ、「十軒が十軒ながら公卿の宿」とうたわれたことから、この名がついたともいわれる。雛市は尾張町、浅草、池之端、麴町、駒込などにもあったが、十軒店には及ばなかった。

右手に描く小さい店は道路上につくった仮の店舗らしく、ひな壇用の小道具を扱っている。雪洞、行灯、花瓶、屏風などがみえる。店に上がると右手では向かい合って両手を挙げている二人は買値、売値が決まって手締めを始めるところか？ 棚の人形は内裏様にお姫様、矢大臣に恵比寿様などで間もなく武者人形に交代する。



御茶の水
水道橋
神田上水懸樋

11. 御茶ノ水 水道橋

お茶の水の由来は、将軍のお茶にも供したほどの美味しい水を得る井戸がこのあたりにあったことからついた名といわれる。絵図は湯島聖堂側から眺めた景色で、すぐ前方の橋は神田上水の懸けた樋(とよ)である。水は水源の井之頭から木の水道管を通して史兄やお城に給水された。この高い橋桁の向こうには大名行列らしき一団が通る水道橋が見える。川下りをする小舟には3人の客が渓谷の景色を愛でているようだ。

この近くにある昌平黌の教授や学者は、よく船を出して四季折々の効用や月などを鑑賞したという。茗溪の名前の由来も彼等が言い伝えた。因みに御茶ノ水駅横の通りにこの茗溪通りという名前がついている。

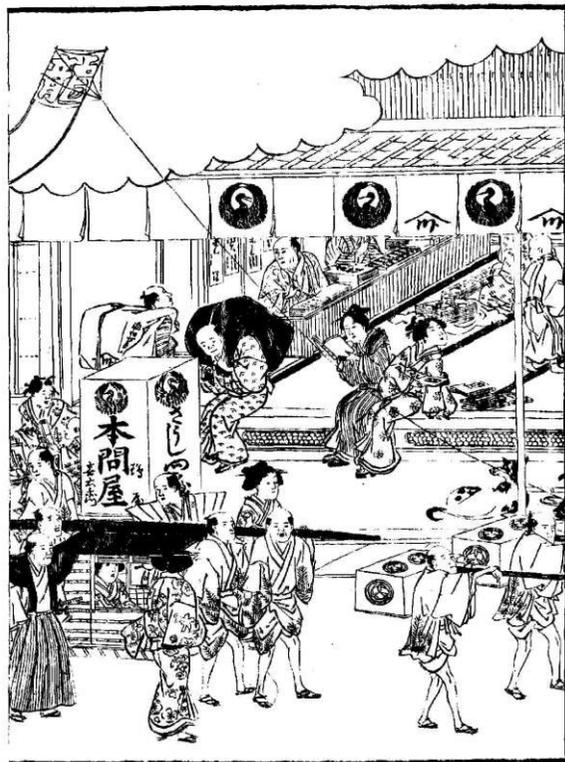
江戸名所図会の「神田川」の説明では、仙台の伊達侯が徳川の命で湯島台を掘り進みと伝わっているのは少し誤りがあり、実際は古老の説に慶長年間(1596-1615年)に水戸藩邸前の堀を浅草川へ掘り進め、その土で土手を築き内外の隔としたとある。



於玉が池の古事

12. 於玉が池の古事

桜が池といって古地図では今の不忍池より大きい池である。江戸名所図会の時代も今も神田松枝町の人家の裏に「於玉稲荷」と称する小祠がある。言い伝えではお玉の霊を祀っている。昔の池の名残で小さい井戸の形が残っている。昔この地は奥州への道筋に当たり池の桜木のそばで容色優れた女が往来する旅人にお茶をすすめていた。時に同じ頃、男二人が同時にこの女を見初めてしまい、女は思い扱い兼ねて、ついにこの池に投身し死んでしまった。里人は之を哀れみ亡骸を池の畔に埋めた。此の言い伝えで「お玉が池」の名が残った。現在もビルの谷間に小さい祠があり、お参りする人々も絶えない。



13. 錦絵

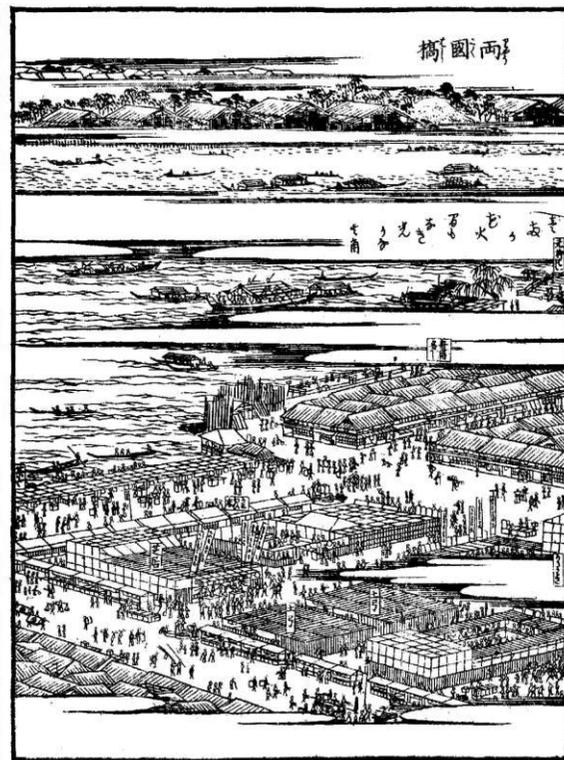
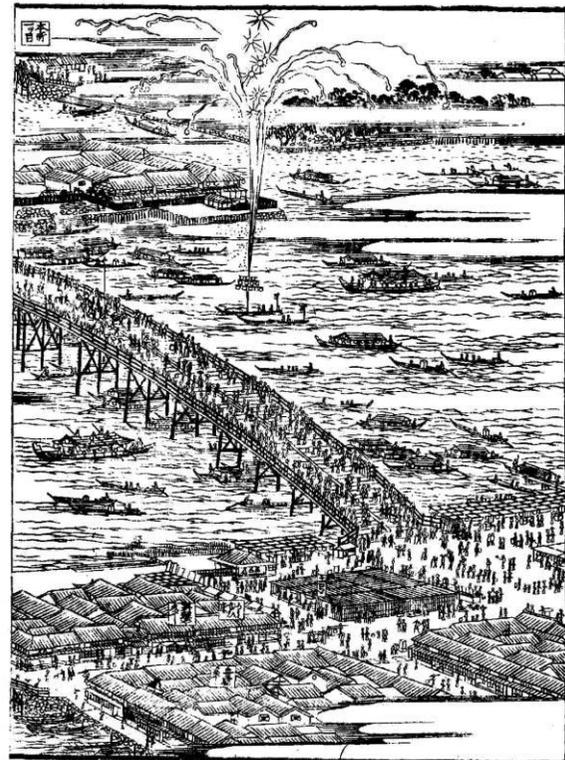
通油町に手広く商売する書物問屋「仙鶴堂」の店先の様子を描いている。元々は京都の書物問屋で、京都の本家は寛永年間(1624~44)から幕末まで続いた老舗で近松門左衛門など、浄瑠璃本を扱う江戸前期を代表する草紙屋であった。万治年間(1658~61年)に江戸に設けた出店がのちに独立し、明治まで続いた。

江戸店は、錦絵も売り出す江戸有数の地本問屋になり、その店頭風景は規模の大きい「大店(おおだな)」である。

3代目の店主鶴屋喜右衛門は、歌川豊国の挿画による『絵本千本桜』で好評を得、江戸に一大ブームを作った。店の奥には新版の錦絵が高く積まれている。凧揚げの子供の顔を絵馬を肩にした男が行く。この頃、初午に絵馬を買って稲荷神社に納めることがはやった。

左の方に夜間にも目立つ蝋燭入りの大きな行灯の看板が出ている。軒下に鶴丸印のマークがいくつも目立っている。店や店主の名前から描いたマークだが、何故か「日本航空JAL」のマークと全く同じで、最近起きた東京オリンピックのエンブレム問題を思い出させる。

この時代だから勿論商標登録制度などはなかった。



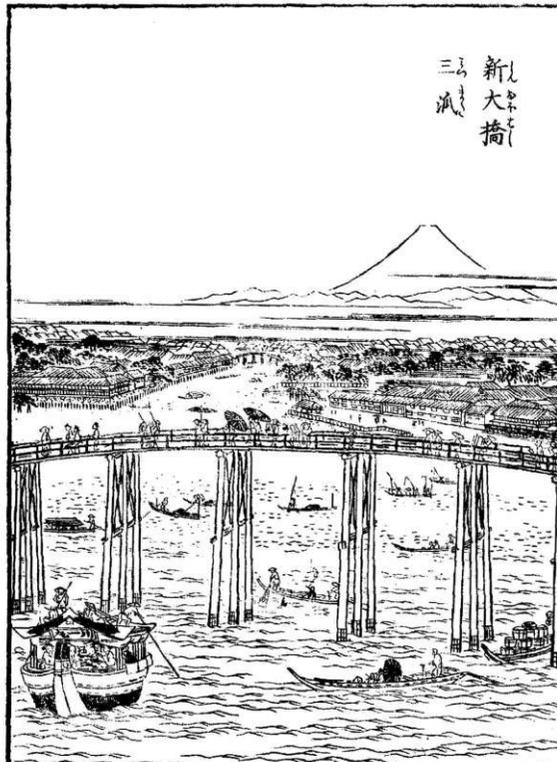
14. 両国橋

浅草川の下流、吉川町と本所本町との間に渡した長さ96間(174メートル)で橋の前後と橋上に番屋を設けて警備している。

死者10万人を数えた明暦3年(1657年)の大火で、被害を大きくした原因の一つは橋がなかったためだったので、幕府はすぐこの両国橋を建立し、1661年に竣工した。橋の両側は日除け地として広場になっており、多くの遊技場がそこにでき、浅草・上野と並んで人出が多かった。小屋掛けは「かるわざ」「土弓」「芝居」や茶屋、船宿、料理屋などの看板が見える。この場所の納涼期間(川開き)は享保18(1733)年5月28日が初めて8月28日に終わった。夏季には特に賑わい、陸では見世物場所風で旗が翻り、両岸ではお茶屋の床几が水辺に並び、灯の光が玲瓏として川の流れに映ずる。川の中では花火見物の多くの船が一面に浮かび水面を覆い隠すほどである。芸人を乗せて音曲を奏でたり、放歌の音が耳に満ちて実に大江戸の盛り事である。

このあたり 目にみゆるもの みなすずし
この人数 船なればこそ すずみかな

芭蕉
其角



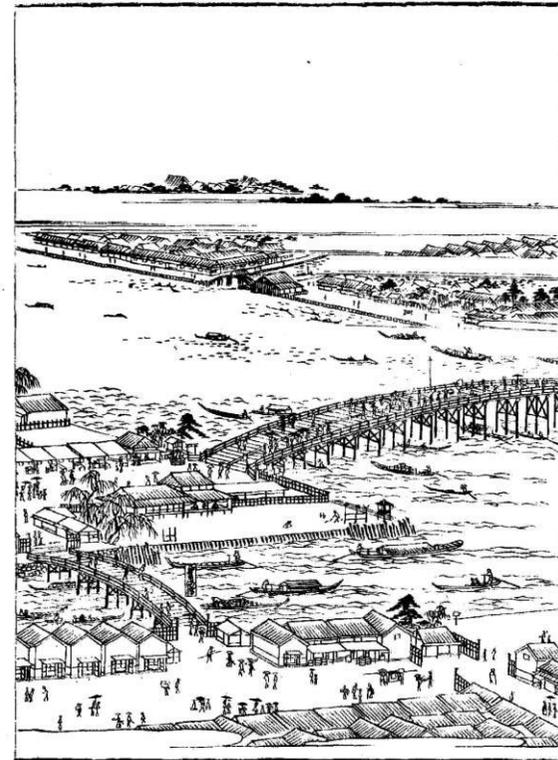
15. 新大橋

両国橋より川下で、浜町から深川六間堀に渡す橋で、長さおよそ 108 間(196メートル)あり、元禄6年(1693年)に架けられた。両国橋の旧名を大橋と言ったので、この橋は新大橋と名付けられた。

芭蕉の2句： 初雪や かけかかりたる はしのうへ
ありがたや いただひて踏む はしのしも

新大橋の下流で分流のところを三派(みつまた)という。浅草川と箱崎の間の流れとの分かれるところからこの名がついた。ここは月の名所でもあり。昔は遊女・歌舞妓の類がここに船を浮かべて宴を催し、ことさら、月の出た夕べは清い光の隈なく照らす様子を愛でたり、酒と歌謡いで大層賑やかであったという。

山もあり また船もあり 川もあり 数はひとつた みつまたの景 半井ト養



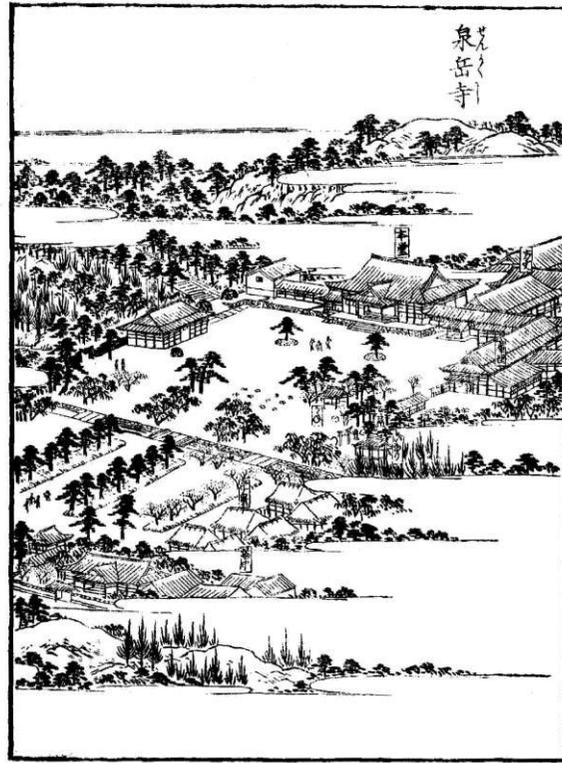
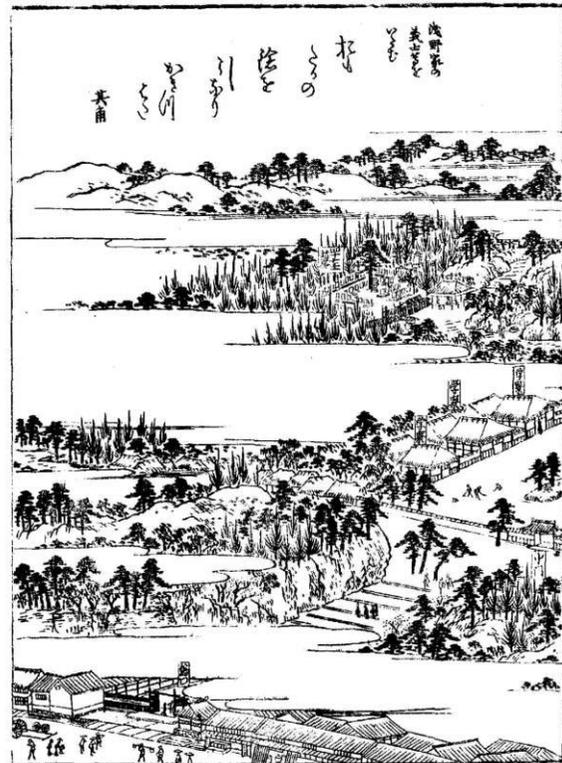
16. 永代橋

箱崎と深川佐賀町にかけた橋で、元禄11年(1698年)5代将軍綱吉の50歳を記念した橋で、110間(200メートル)もある。諸国からの廻船が多くこの下をくぐるので橋の高さは至って高い。東南は大洋に面し富士山は江戸城の西にそびえ遠く筑波山の遠嶺が霞んで見える。宏大な光景に儒学者、服部南郭の漢詩が趣をそえて気宇壮大である。この橋は老朽化していたとき、修理がゆきとどかず、文化4年(1807年)8月19日深川富岡八幡宮の祭礼のとき、混雑する橋上の群集を載せたまま、中央部から丸ごと崩落した。

当日は、四日降り続いた雨もようやく上がり、祭礼の行列が永代橋を渡りはじめると同時に、見物をしよう待ちかまえていた群集が殺到した。押し寄せた群衆は、永代橋の中央で衝突して身動きが取れなくなった。その重みに耐え切れなくなり、永代橋はついに崩落したが橋を渡ろうとする群衆の動きはやまず、両岸から押し寄せる人々の圧力で人の落下が止まらずに続き、死者 900 人、行方不明者を合わせると 1,500 人以上という大惨事になった。(東京都の海福寺供養塔説明では死者440名)

上野寛永寺の根本中堂建立で余った材木をもとに造られており、幅3間余(約6m)と、当時としては最大規模を誇る大橋だった。下を船が通過するので、橋脚をことさら高くしたのも、橋を巨大化することになった。崩落事故が起きた当時、109年の経過で永代橋の老朽化は進んでいたが、折からの幕府の財政難で、補修のための資金のねん出が出来ず、なおざりにされていた結果の痛ましい事故だった。

左手から大川に注ぐのは日本橋川下流の新堀で、架かっている橋を豊海橋という。この橋を渡ったところに御舟手番所があって、往来する船を監視した。豊海橋の手前、右手の河岸では船を造っている様子である。



17. 増上寺

関東浄土宗の総本寺で、徳川将軍家の菩提寺として広大な敷地に多くの伽藍が立ち並び、「其の四」まである図会を見てその荘厳さがわかる。名所図会の本文でも「浄土宗護国篇」や「新著問集」などの古書から繙いて丁寧な寺の歴史の説明が続く。開山は大蓮社西菅上人(1366-1417年)で、本堂の本尊は阿弥陀如来(恵心僧都作であるが運慶の作の説もある。)である。御経蔵に納めてあるお経一式は以前伊豆修善寺にあった源頼朝の妻政子の寄附という。東照大神君(徳川家康)が天正18年(1590)始めて江戸城に入った時、人々は老幼相携えて道路に拝迎していたが、家康が門前を通過した時に寺の和尚、観智国師に言葉をかけ、寺に入り一服された。それ以来家康は当寺を檀家としてご崇敬厚く法要されてきたという。最初の家康との出会いは増上寺が江戸城に近い日比谷にあった時のことであったが、その後寺域が狭いので現在地に土地を賜り、家康の喜捨で広大な伽藍の建設に至った。数百戸の学寮が軒を並べ子院も30余蓋を連ねた。3千人の僧侶が常に参集し、仏閣の荘厳さはまさに浄土がこの世で再来すると思われる程であった。

以上は江戸名所図会での当時の説明であるが、明治後の苦難の時代を経て現在では敷地はかなり狭くなったが、それでも16000坪に多くの建物が建つ。

18. 泉岳寺

万松山泉岳寺は、東海道を日本橋から行くと右側にある。当初は慶長年間に、門庵宗関和尚が外桜田の地に創建した禅刹である。寛永18年(1641)に今の地に移転した。

本尊釈迦如来は2尺ばかりの座像であり、脇士(御伴)は文殊・普賢である。当寺は播州浅野家の菩提寺で浅野内匠頭長矩(1667-1701)と義士47人の石塔がある。2月、3月の4日及び正月、7月の16日には英名を追慕して、ここにお参りする人は多い。元禄14(1701)年3月14日、浅野内匠頭長矩が吉良上野介義央(1641-1702)を刃傷に及んだことで、長矩に死を賜った。その後浅野家の家老大石内蔵助良雄(1659-1703)が本国の播州赤穂にあつて主君の仇とともに天を戴かずという義により、血盟をもって同志を集め、ついに元禄15(1702)年12月14日義士47人で義央の首級をあげた。

本所の吉良邸から一同当寺まで至り、亡君の墓前にその首級を奉げ、翌16(1703)年2月4日に切腹したことは諸書に詳しいので之を省く。以上が本書の説明文要点であるが、現在の泉岳寺も参拝人の線香の煙が絶えない。

浅野家の義士をいたむ句： おもだかの 槍を引くなり かきつばた 其角